No.22　島津公爵家の愛犬たち
～ シロの武勇伝 ～

本学の本館である旧島津家本邸を建てた島津忠重公爵（島津家第 30 代当主）は愛犬家で、日本ではもちろんのこと大使館付武官として渡英した際にも犬を飼っています。

今回は、忠重公の長男・島津忠秀氏（第 31 代当主）の忠重公追想文「追憶」（『しらゆき　島津忠重　伊楚子　追想録』所収）より、かつての袖ヶ崎邸（旧島津家本邸）で公爵一家と共に過ごした愛犬たちをご紹介します。

※袖が崎（そでがさき）とは旧島津家本邸の周辺一帯をさす明治・大正時代の地名

袖ヶ崎邸では猫が飼われたことはなく、常に 2、3 頭の犬が飼われていました。
大正 11 年生まれのフォックステリアの牡犬「シロ」を中心に、昭和の初め頃には「ブチ」（フォックステリア　牡）や「ボンゾー」（ポインター　牝）といった面々が顔を揃えていました。この「犬部隊」は、よその犬や猫と遭遇すれば「一大合戦」を繰り広げるのが常で、シロは野良猫との戦いで目を負傷したり、野犬との闘争で脚に傷を負ったりすることもありました。忠重公は日曜日になると、ご子息とこの「犬部隊」を連れ、２万８千坪の広大な邸内を運動がてら散歩されるのが日課でした。

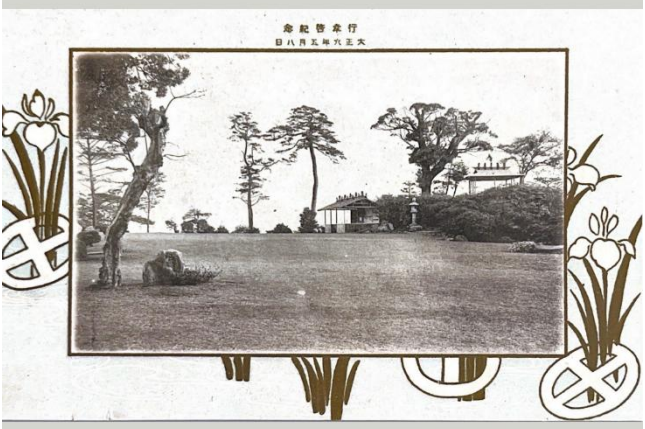
シロにまつわる二つのエピソードを忠秀氏の追想文から引用しましょう。

「父（忠重公）の供をして私達兄弟（忠秀氏ら）が邸内の雑木林を散策中のことだった。カムロガ池（邸内北西に位置した大きな池）の近くに来た時、シロがくさむらの中で何かを見つけて吠えだした。駆けつけてみると二メートル近い大きな青大将がいる。シロは初めは蛇と対峙してただ吠えているだけだったのが、父のけしかける声に勇気百倍(？)一方蛇は人間の接近に形勢不利とみたか、逃げ腰になったところを、踏み込んだシロに首根っこを咬みつかれ、左右に烈しく振られては投げ飛ばされ、これを二、三回繰り返されてはさしもの青大将もぐったりとのびてダウンし、戦いはあっけなくシロの勝利に帰したのだった。」

「シロはヒキガエル（ガマ）とも手合わせした。夏の夕方になると、定って広い芝生の所々にガマが出陣し、飛び交う昆虫類を捕食するのが見られた。ガマにも大体の縄張りがあったようで、殆どがツツジ園と芝生との境近くに約五メートル間隔に並んでいて遠くからでもすぐにそれと分かった。シロがまだ若い頃のある時、父がその中の一匹にけしかけた。シロは直ぐ跳んで行ってガマの頭に噛みついたが、瞬間跳び離れ、口から多量のよだれを流して、うらめしそうにしている。これはガマの目の上や頭の周辺に分布している、あのいぼから防衛のために出す苦い毒液にやられたのだ。晩年のシロは私たちがけしかけても、相手がガマだと側まで行って臭をかいだだけで、いやな思い出があるせいか、首を少し振って戻ってくるようになり、相手にしなくなった。」

昭和 8 年、11 歳になったシロはフィラリア病でこの世を去ります。
その時の忠重公の様子を、忠秀氏は「一人の友を失ったかのように、しばし暗然たる面もちだった」と記しています。
シロの遺体は、袖ヶ崎邸内（本学敷地内）のとある大木の根元近くに今も静かに眠っているそうです。

大正6年竣工当時の袖が崎邸（旧島津家本邸）庭園東側



行幸啓記念絵葉書　（袖が崎　島津　大正６年５月８日発行）
本学所蔵

右手小高いところの建物は大正天皇・皇后両陛下行幸啓時の
ご休息所の四阿、中央付近の灯籠の左は楽焼所

現在の本学奥庭東側

右手ビルの左角下あたりが大正天皇・皇后両陛下行幸啓時のご休息所跡

大正6年竣工当時の袖が崎邸（旧島津家本邸）庭園西側

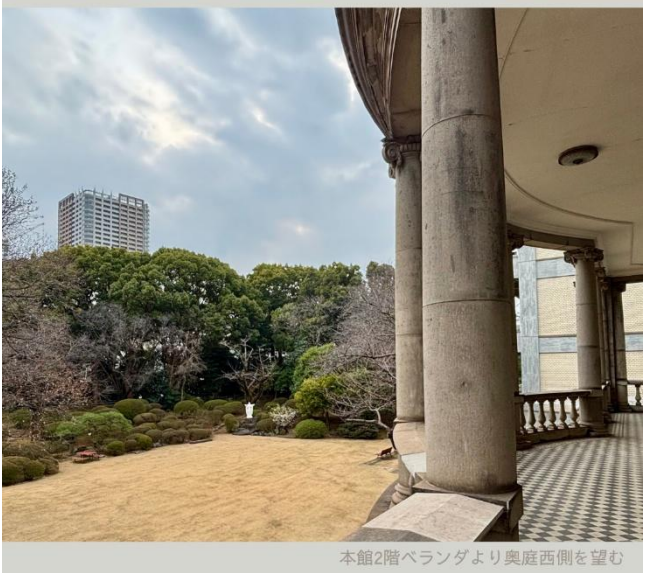
行幸啓記念絵葉書　（袖が崎　島津　大正６年５月８日発行）
本学所蔵

左手にフウの木、中央に島津家の先祖を祭る神社二社

現在の本学奥庭西側

中央付近の白いキリスト像あたりが神社跡

本館2階ベランダより奥庭東側を望む



本館2階ベランダより奥庭西側を望む

＊＊＊

「史料室だより」は清泉女子大学公式インスタグラムにて連載中です。